広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第２号　2021　445－453

意見調整の開始部における「よね」の連鎖構築

―日本語母語話者と中国人上級日本語学習者を対象に―

王　　詩　凝

（2021年10月５日受理）

Research on the Sequence-structure of *yone* in the Opening Section of Opinion Adjustment: A Comparison of Native Speakers and Learners of Japanese

Shining Wang

Abstract: The differences in the process of adjusting opinions in Japanese by native speakers and non-native speakers were analyzed in previous studies. This study focuses on the relevance of the opening process and linguistic form to compare the similarities of the sequence type and pattern between native speakers and learners of Japanese when using *yone* in the opening section. The results indicate that native speakers tend to use *yone* to summarize problems when orientating the contents of the proposal. In contrast, learners used *yone* when orientating the state of the proposal. Second, in a sequence of expressing another's advantage, native speakers tended to express request or agreement again after expressing agreement using *yone*, while learners only repeated agreement. Additionally, the usage of *yone* to propose appears not only when expressing one's own advantage, but also in the sequence of expressing the advantages of both positions. However, the latter did not appear in the learners' dialogues.

Key words: sequence type, pattern, *yone*, learners of Japanese
キーワード：連鎖の類型，展開パターン，よね，中国人上級日本語学習者

１．はじめに

日常生活の中では，異なる意見を持つ相手と課題の解決を目指して合意を形成するために，互いに意見調整を行う場面が見られる（大和，2009）。意見調整の開始部においては，意見の行き詰まりを解消し，新たな方向性を導くことが重要である。その際に，確認要求表現として多用される「よね」は共通基盤の構築のために重要な役割を果たすと言われている（伊藤，2019）。

意見調整場面の主要な構成要素として提案や意見があげられるが（大浜・程野，2011），それらは「よね」によって言及されることが多い（椙本，1998）。

近年，中国語を母語とする日本語学習者数の増加に伴って，日本語母語話者との間で課題解決を目的とした会話を行う機会も増加していることが予想される。しかし，意見の行き詰まりが生じた後の展開の仕方や提案・意見の述べ方は，日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者とでは異なる傾向がある（水野他，2019；李・松崎，2009）。また，確認要求表現の意味は日中両言語において異なるため（井上，2016），

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：永田良太（主任指導教員），白川博之，柳澤浩哉，高永　茂

中国語を母語とする学習者が意見調整を開始する際に，「よね」による談話展開に問題が生じる可能性が考えられる。日本語教育の観点から，「よね」を会話の中で適切に運用できるようになるためには，学習者の母語の要因を考慮しつつ，両者の使用傾向の異同を把握する必要がある。

そこで，本稿では，意見調整の開始部において，日本語母語話者と中国人上級日本語学習者がそれぞれどのように「よね」によって提案や意見に言及し，談話を展開するかを明らかにすることを目的とする。

２．先行研究と本稿の研究課題

日本語母語話者の談話展開に関して，大和（2009）は課題解決型の話し合いをデータとして，意見調整が始まるきっかけや意見調整を試みるシークエンスの展開過程およびそこに見られる構成要素を分析している。その結果，「ターンの譲り合い・沈黙」や「相手に対する評価の引き上げ」などが見られた。また，その際にはどちらかの話者によって一方的に行われるのではなく，話者どうしで連鎖を構築しながら行われることが明らかにされている。水野他（2019）は討論談話４組をデータとして考察した結果，意見の行き詰まりが生じた後には「条件すり合わせ」が見られ，共有意見の再度の確認の際には「条件確認」が行われると指摘している。

日本語母語話者の表現形式の使用に関して，蓮沼（1995）は確認用法の枠組みで意味特徴を考察した結果，「よね」には「相互了解の形成確認」という固有の用法があり，「判断の共有を確認し合う」というニュアンスがあると述べている。このような文レベルの特徴に加えて，談話中での使用傾向に関する研究がなされてきた。柏崎他（1997）では，課題解決のための「提案」が行われる前段階として，会話参加者に配慮を示すために提案要求が行われること，また同意を要求したり理由を述べたりする際に「よね」が用いられることが指摘されている。伊藤（2019）は合意形成談話10組をデータとして考察した結果，会話の停滞が生じた後，議論すべき案が提示され，すでに却下された前の案との比較が行われると述べている。また，母語話者は「よね」によって提案内容が妥当である理由を提示したり共通認識を確立させたりすることで，合意に向けて連鎖を構築していくことが明らかにされている。

一方，日本語学習者の使用傾向に関して，水野他（2019）は「無人島で生活する際の持ち物」をテーマとした議論談話４組を分析した結果，中国人上級日本語学習者どうしの会話では，意見の行き詰まりが生じた後にテーマに関する「持ち物募集」と「持ち物提示」が見られ，共有意見の再度の確認の際には「持ち物確認」が行われる傾向があると述べている。伊藤（2019）は英語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者による合意形成談話８組を分析した結果，意見調整を開始する際に，日本語母語話者は「よね」を用いて考慮すべき点やそれに基づいて形成された他の案に言及しているが，学習者はそのような発話に対してあいづち以外の反応を示さないと指摘している。

これまで見てきたように，意見調整の開始部については談話レベルでも研究がなされているが，個別の表現形式と談話展開との関わり方や母語話者と学習者の使用傾向に関する分析は不十分であると言える。

まず，大和（2009）と水野他（2019）は意見調整の開始部の展開過程や構成要素について考察を行っている。しかし，個別の形式との関わり方には着目されておらず，本研究で扱う「よね」が談話展開にどのように関わるかについても明らかにされていない。

また，柏崎他（1997）では，提案要求と提案の話段を中心に，伊藤（2019）では，「提案―応答」の隣接対を軸に，提案ごとに合意に向けてどのように展開されるか，またその際に「よね」がどのように用いられるかについて分析されている。しかし，意見調整の開始部の特徴をふまえて考えると，話し合われる内容によって連鎖構築のされ方が異なるとともに，それぞれの連鎖内における各構成要素の出現順序も異なることが予想される。日本語学習者が円滑に意見調整を行うためには，構築される連鎖の類型や展開パターンについてさらなる分析を行う必要があるであろう。それに，柏崎他（1997）は形式の文法的側面に着目されておらず，談話中で見られるそれらの使用傾向と「よね」の固有の用法がどのように関わるかについても明らかにされていない。

さらに，学習者は合意に向けて意見調整を行う際に確認要求表現を使用しない傾向があることが指摘されているが（伊藤，2019），学習者の特徴を明らかにするために，出現頻度に留まらず，「よね」が用いられる際に見られる連鎖の類型と展開パターンが母語話者とどのように異なるか，また「よね」の代わりに他の形式が用いられる際の談話展開がどのように異なるかについても考察する必要があるであろう。

本稿では，先行研究に残された上記の問題点をふまえ，以下の二つの研究課題について明らかにする。

①意見調整の開始部において，日本語母語話者と中国人上級日本語学習者が「よね」によって提案・意見に言及する際に，どのような連鎖の類型と展開パターンが見られるか。

②「よね」によって提案・意見に言及する場合に見られる連鎖の類型と展開パターンに関して，日本語母語話者と中国人上級日本語学習者にはどのような異同があるか。

3．研究方法

3.1　分析資料

本稿では，日本語母語話者どうし16組の課題解決型談話，中国人上級日本語学習者（以下，日本語学習者）と日本語母語話者16組の課題解決型談話をロールプレイで収集した。会話の平均時間は母語場面が17分６秒であり，日中接触場面が14分18秒である。日本語学習者は日本滞在歴が１年以上で上級レベル（N1取得）の大学院生であり，日本語母語話者は全員大学生・大学院生である。

ロールプレイでは，「X 大学に来たばかりの留学生を案内するためのプラン」を会話のテーマとして設定した。これは，なるべく自然な談話を収集することを意図して複数のテーマで予備調査を行った結果，会話が持続的に展開されることが確認されたためである。また，日本人学生と留学生にとって大学生活の中で遭遇することがあり得る場面であり，議論しやすいテーマであることも選定の理由である。

一定量の発話を引き出すために，決定が必要な項目として，「日時」「場所」「イベントの内容」「費用」「交通手段」をロールカードに記した。また，予備調査の結果，課題を解決する際に「同等・親」の関係で対立が生じた場合ほど「よね」が多用され，適切に使用することがより重要であることが確認されたため，二人の話者の関係を「同等･友人どうし」に設定した上で，一方の参加者には「日帰り旅行」，もう一方の参加者には「一泊二日の旅行」という時間と費用が異なる立場がそれぞれ与えられた。異なる立場から，話者自身の提案・意見で議論し，最終的に一つの案を決めるやりとりが32組すべての談話で確認された。

なお，日中接触場面の学習者と日本語母語場面の母語話者の使用傾向を比較するために，対象者とする学習者と母語話者を同じ立場で各16人（それぞれ日帰り旅行８人・一泊二日の旅行８人）に揃えたものを本稿の分析資料とする。

3.2　分析方法

分析の手順としては，まず，大和（2009）に基づいて，「対立の緩和が始まる発話から，新たな具体案が導かれるまでの部分」を「意見調整の開始部」として認定し[1]，開始部を抽出した。なお，本稿で扱う「対立の緩和」とは，ターンの譲り合い，相手に一部理解を示したり，自らの問題点にも言及したりする発話とした。

また，本稿では提案・意見に言及される場合に着目するため，開始部における提案・意見に関する構成要素を認定した[1]。認定する際には，大浜･程野（2011）や伊藤（2019）に基づいて，それぞれの要素を次のように定義した。

「提案」：決定が必要な項目に対して具体的な案を挙げる発話。その案を行うことが望ましいという発話。
「賛成」：提案に賛同する理由。提案に対して肯定的な立場を示す発話。提案の利点を挙げたり相手の意見を強化したりする発話。
「譲歩」：自らの提案の問題点に言及する発話。自らの立場に不利な意見を述べる発話。
「問題の総括」：課題解決に向けた視点。現状と目標のギャップ。解決すべき課題についてのまとめ。

次に，開始部に見られる連鎖を，話し合われる内容によって，課題解決のために相互に意向を固める「方向づけ」と相互の立場の原案に対する吟味や価値づけである「評価づけ」という２つに分類した。なお，本稿で扱う連鎖とは，会話上のやりとりの連続である（椙本，2000）。認定するにあたり，それぞれの下位分類を以下のように定義した。

【提案内容に関する方向づけ】:費用を安く抑えるか，レジャーと案内のどちらの目標を優先するかを決める。
【提案のあり方に関する方向づけ】：折衷案かどちらかの立場の原案に絞るかという案の種類を決める。
【相手の立場のみに有利な評価づけ】：相手の立場のみについて，提案の利点・妥当性を検討する。
【自らの立場のみに有利な評価づけ】：自らの立場のみについて，提案の利点・妥当性を検討する。
【双方の主張への肯定】：両者の提案を比較することで，それぞれの利点・妥当性や両者の特徴・共通点をまとめる。

連鎖の類型の分析に関しては，まず，「よね」[2]によってどのような構成要素に言及されるかを調べる。次に，それらの構成要素がどのような類型の連鎖において出現するかを分析し，それぞれの類型の連鎖の出現数と出現割合を調べる。

展開パターン[3]の分析に関しては，各類型の連鎖内において，構成要素がどのような順番で出現するか

を見る。まず,「よね」発話の直前または直後にどのような構成要素が見られるかを分析し,「よね」が含まれる隣接ペアを〈A—B〉によって表す。次に，それらの隣接ペアの前後にはどのような隣接ペアが見られるかを分析し，それらの一連のやりとりを〈A—B〉→〈C—D〉のように表す。その上で，類型別に見られる展開パターンの出現数と出現割合を調べる。

例えば,【提案内容に関する方向づけ】においては,「A：お金の問題が一番あるよね」「B：バーベキューを日帰りでするみたいなパターンができんのかね」という隣接ペアが見られたが，これに先行して〈問題の総括—言い換え〉が行われている。このように当該の連鎖の前後の文脈に着目して展開パターンを分析する。

これらの結果をふまえ，日本語母語話者と日本語学習者にそれぞれ多く見られた連鎖の類型と展開パターンを調べ，異同をまとめる。

4．分析結果

4.1　日本語母語話者の使用傾向

まず,日本語母語話者が提案･意見を述べる際に,「よね」がどれぐらい用いられているかについて確認しておきたい。提案・意見に関する構成要素の出現頻度を見てみると,「賛成」(48回）と「提案」(47回）が最も多く見られ,その次に多く見られるのは「譲歩」(28回）と「問題の総括」(20回）である。その中で,「よね」によって言及される場合に着目すると,「賛成」が16回,「提案」が13回,「譲歩」が４回,「問題の総括」が10回観察された。それらの構成要素は他の形式によっても表れるが,「よね」によって最も表れやすいのは「問題の総括」(50.0%）であり，その次に表れやすいのは「賛成」(33.3%）と「提案」(27.7%）である。

では,「よね」によってそれらの構成要素に言及される際にはどのような類型の連鎖が構築されるのであろうか。「問題の総括」「賛成」「提案」に言及する際の「よね」の連鎖の類型をまとめたものが表１である。

表１　連鎖の類型〈日本語母語話者〉

連鎖の類型		出現数（割合）	合計
方向づけ	提案内容に関する方向づけ	6回（60.0%）	10回（100%）
	提案のあり方に関する方向づけ	4回（40.0%）	
評価づけ	相手の立場のみに有利な評価づけ	9回（47.4%）	19回（100%）
	自らの立場のみに有利な評価づけ	4回（21.0%）	
	双方の主張への肯定	6回（31.6%）	

表１から，日本語母語話者の会話において「よね」によって「問題の総括」に言及する際に,【提案内容に関する方向づけ】という連鎖が多く構築されることがわかる。また,「よね」によって「賛成」に言及する場合には【相手の立場のみに有利な評価づけ】,「よね」によって「提案」に言及する場合には【双方の主張への肯定】という連鎖内において，それぞれ多く現れることがわかる。なお,【双方の主張への肯定】という連鎖内において「提案」も「賛成」も「よね」によって言及される場合は３例見られた。

次に，それらの連鎖はどのように展開されるかについて見てみたい。【提案内容に関する方向づけ】【相手の立場のみに有利な評価づけ】【双方の主張への肯定】の展開パターンをまとめたものが表２である。なお,「よね」によって言及される構成要素を太字で示す。

表２　展開パターン〈日本語母語話者〉

連鎖の類型	展開パターン	出現数（割合）
提案内容に関する方向づけ	〈問題の総括—言い換え・繰り返し〉n[4] →〈**問題の総括**—新たな具体案の導入〉	5回（83.3%）
	〈問題の総括—言い換え・繰り返し〉→〈**問題の総括**—他の問題総括〉	1回（16.7%）
合計		6回（100%）
相手の立場のみに有利な評価づけ	〈提案—**賛成**〉→〈提案—精緻化要求〉→〈精緻化—（賛成)〉	5回（55.6%）
	〈提案—**賛成**〉→〈提案—賛成〉	4回（44.4%）
合計		9回（100%）
双方の主張への肯定	〈前提提示—**提案**〉→〈前提提示—賛成〉→〈繰り返し—（繰り返し)〉	4回（66.7%）
	〈前提提示—前提提示〉→〈**提案**—繰り返し〉→〈賛成—繰り返し〉	2回（33.3%）
合計		6回（100%）

表２から,日本語母語話者では「問題の総括」と「言い換え･繰り返し」に続いて「問題の総括」が「よね」によって再び言及され，新たな具体案が導かれるというパターンで【提案内容に関する方向づけ】の連鎖が構築されやすいことがわかる。また,【相手の立場のみに有利な評価づけ】の連鎖が構築される際には,「よね」によって相手の提案に対する賛成が示された後，精緻化要求が行われたり，再度の賛成が表明されたりするパターンが見られた。さらに,【双方の主張への肯定】

の連鎖が構築される際には，前提をふまえた上で，「よね」によって自らの提案の妥当性が主張されるとともに，相手の提案の妥当性にも言及する形で両者の提案の特徴が比較されるというパターンが見られた。

それぞれの具体例を以下に示す。なお，これ以降の会話例において，NS は母語話者，NNS は非母語話者（日本語学習者）を表す。また，会話例中の（　）はあいづち，〈　〉は音調をそれぞれ表す。

例（1）【提案内容に関する方向づけ】

NS2：なんか，来たばかりの留学生に7000円を払わせるのは結構ね。

NS1：そうね，7000円あったらね，結構暮らせると思うから。

NS2：うん，しかも，留学生でしょう。（うん）たぶんそのお金あるわけじゃないから，（うん）7000円もでかいと思うんだよね。

NS1：たぶんまだバイトしてないしね。

NS2：うん，来たばかりだよね。（うん）そうなるとな，なかなかなあ。（うんうん）うーん，お金の問題が一番ある**よね**。〈上昇下降調〉

NS1：こう，バーベキューを日帰りでするみたいなパターンができんのかね，なんか。

例（1）は，話者間で NS2の「バーベキュープラン」に傾きつつあるが，まだ議論がまとまっていないという場面である。NS2は当該の提案について，「留学生に7000円を払わせるのは結構ね」「7000円もでかいと思うんだよね」という発話によって「お金の問題」があるということに言及している。それに対して，「7000円あったら結構暮らせると思うから」「まだバイトしてないしね」といった NS1の一連の言い換え発話が見られるように，NS1は留学生の状況に言及しつつ，相手の意見を補強している。

その後，NS2は「よね」によって「留学生の状況を考えると，金銭面に配慮すべき」という判断が相互に共有されていることを確認しつつ，「お金の問題が一番ある」という最も解決すべき問題を総括している。それをふまえ，「バーベキューを日帰りでする」という「費用を安く抑える」ための新たな具体案が導かれている。このように，新たな方向性を導くために，「よね」で問題の総括が行われている。

次に，評価づけが行われる際の展開パターンを見る。

例（2）【相手の立場のみに有利な評価づけ】

NS17：どっちがいいかな。なんか宮島と

NS18：どうだろう。なんか一泊二日って言っても，（うん）なんか別に朝から出なくてもいいかなと思って，（中略）夜は部屋でゆっくりおしゃべりするとか，そういうのもいいかなと思って，一泊二日だけど，まる二日っていうより，なんっていうのかな，こう一日半とか。

NS17：まったりっていう感じだ**よね**。〈上昇下降調〉

NS18：そう，あまり疲れない程度に，（うん）結構宮島の中だけでも行くとこあるし，絶対来たばかりだったら，有名だけど，まだ行ってないんじゃないのかなと思って，厳島神社とかもだし。

NS17：うん，宮島だったら，どういうルートで回るの？

NS18：そうだね，なんか，えーと，（中略）ここに着くじゃん。（うん）たぶん王道だけど，この辺たぶんお土産とか結構楽しいし，（うんうん）行きにとりあえず通って，厳島神社に行って。

例（2）は，これ以前に提示された NS17の「日帰り旅行」が時間的に厳しいために却下された後のやりとりである。「どっちがいいかな」「どうだろう」（斜体）が見られるように，会話の停滞が生じている。その停滞を解消するために，NS18は「自らの提案は日帰りと一泊二日の中間的な一日半である」と相手に譲歩しながら主張しようとしているが，「なんっていうのかな」（斜体）という発話が見られるように，適切な表現を選択するために考えている。

そこで，NS17は相手が次に述べようとする意見を予想しつつ，自らの提案より相手の提案のほうが「まったりとした感じである」ということを「よね」によって言及することで賛成を示している。「そう，あまり疲れない程度」という NS18の応答発話が見られるように，「時間の余裕」が要点であることが話者間で共有されている。その後，NS17は「どういうルートで回るの？」という発話によって精緻化要求を行っているが，先行発話との関わりを見てみると，「時間の余裕」を考慮した上でのルートを提示するよう相手を誘導するという意図が読み取られる。このように，相手に賛成を示した後，妥協できそうな点に関してさらなる精緻化要求を行う展開が見られた。

最後に，双方の主張への肯定が行われる際の展開パターンを見ていく。

例（3）【双方の主張への肯定】

NS28：どんな留学生が来るかもわからんから，（うん）何人でその金銭的な面とか，（うん）その子たち来てから，その子たちと相談できたら，この二つのプランどっちがいいみたいな，（うん

うん）聞いてもいいんやけど。（うん）で，7000円最悪ちょっと費用が足りなかったら，私たちが出す。

NS27：それだったら，別の話やろう。できるだけ安く抑えられるのはこっちのプラン**よね**。〈上昇調〉

NS28：そうやな，だから，とりあえず，そっちにしておいて，（うん）でも実は宮島でこの日だけこういうイベントがあるんだよって，ただし7000円かかるんだよ。どっちがいいって聞いて，やっぱりこっちのほうがいいんだったら，こっちにする。金銭面優先するか，中身，レア度を

NS27：確かにレア度が高いのはそっち**よね**。〈上昇調〉

NS28：まあ，レア度で言ったら，こっちがいいと思います。でも，金銭面で言ったら，そっちがいいと思います。

例（3）は，これ以前に提示された案が話者間で却下され，会話の行き詰まりが生じた場面である。そのような行き詰まりを解消するために，NS28は「留学生の国籍と金銭面の感覚」という前提に言及することで，新たな局面を切り出そうとしている。それをふまえ，NS27は「安く抑えられるのはこっちのプラン」という費用の観点から見た自らの提案の妥当性に「よね」によって言及している。

それに対して，NS28は賛成を示しているが，再度中立的立場で「金銭面を優先するか，レア度で選ぶか」という留学生の意向を前提に言及しつつ，決定権を留学生本人に委ねるという意見を述べている。それをふまえ，NS27は「レア度が高いのはそっち」というレア度の観点から見た相手の提案の妥当性にも「よね」によって言及している。ここでも，「～のは～である」という文に「よね」が付加されることで，異なる観点から見た両者の提案の特徴が比較されている。それに対して，NS28は再度，中立的立場で相手の意見を繰り返しつつ共感を示している。

このように，「よね」によって自らの提案がなされるのみならず，相手の提案の妥当性にも言及されることで，両者の特徴が比較されるという展開が見られた。

4.2　中国人上級日本語学習者の使用傾向

まず，日本語母語話者と比較するために，日本語学習者は「問題の総括」「賛成」「提案」に言及する際に「よね」をどの程度用いているかを確認しておきたい。構成要素の出現頻度を見てみると，「提案」（25回）が最も多く見られ，その次に多く見られるのは「賛成」（17回）であり，「問題の総括」は７回のみ観察された。また，「賛成」や「提案」に言及する場合，学習者による「よね」の使用はそれぞれ２回のみであり，「問題の総括」に言及する「よね」（４回）も日本語母語話者と比べて少なかった。

それらの構成要素に言及する際の「よね」がどのような連鎖に現れるかをまとめたものが表３である。

表３　連鎖の類型〈日本語学習者〉

連鎖の類型		出現数（割合）	合計
方向づけ	提案のあり方に関する方向づけ	４回（100%）	４回（100%）
評価づけ	相手の立場のみに有利な評価づけ	２回（50.0%）	４回（100%）
	自らの立場のみに有利な評価づけ	２回（50.0%）	

先の表１と上の表３を比較してみると，「よね」によって「問題の総括」に言及する場合，日本語母語話者に多く見られた【提案内容に関する方向づけ】は見られず，【提案のあり方に関する方向づけ】にその使用が偏ることがわかる。また，「よね」によって「賛成」や「提案」に言及する場合，どちらかの立場に有利な評価づけという連鎖に現れるが，【双方の主張への肯定】には見られなかった。

先に見た日本語母語話者の使用と比較するために，【提案のあり方に関する方向づけ】と【相手の立場のみに有利な評価づけ】の連鎖における展開パターンをまとめたものが表４である。

表４　展開パターン〈日本語学習者〉

連鎖の類型	展開パターン	出現数（割合）
提案のあり方に関する方向づけ	〈**問題の総括**―賛成＋原案への偏り/新たな具体案の導入〉	４回（100%）
相手の立場のみに有利な評価づけ	〈提案―**賛成**〉→〈提案―賛成〉	２回（100%）

先の表２と上の表４を比較してみると，【相手の立場のみに有利な評価づけ】において，日本語母語話者に多く見られた精緻化要求のパターンが見られず，再度の賛成のパターンも２例のみである。【提案のあり方に関する方向づけ】において，「問題の総括」が行われた後，原案への偏りや新たな具体案が展開されていくことになる。具体例を以下に示す。

例（4）【提案のあり方に関する方向づけ】

NNS13：えーと，来たばかりだからって考えたら，（うん）やっぱり日帰りかな。

NS45：そうだね。日帰りで行くのがいいかな。

NNS13：あー，広島と宮島，なんか一日以内に両方行きたいな。でも，無理だ**よね**。〈上昇下降調〉
NS45：*そうだね*。〈少し間〉広島市内だとしたら，どうだろうね。原爆ドームと（うんうん）市内ショッピングと（うんうん）縮景園ぐらい？

例（4）は，話者間で「日帰りで行く」という方向性が合意されているが，「どちらかに絞るか，折衷案で行くか」に関してはまだ決まっていない場面である。「日帰りで広島と宮島の両方に行くのは無理である」という問題が「よね」によって総括され，「どちらかに絞る」という方向性が暗示されている。NS45もそのような方向性に賛同していることがNS45の発話の冒頭に見られる「そうだね」（斜体）によって確認される。その後，NS45はNNS13の「広島の日帰り旅行」という案に傾き，活動内容について相手に精緻化要求を行っている。

前節で述べたように，「賛成」や「提案」に言及する際，日本語母語話者には「よね」が多く用いられるが，日本語学習者には「よね」があまり使用されない傾向がある。では，日本語学習者がそれらの構成要素に言及する場合，どのような連鎖の構築が見られるのであろうか。この点に関して，「賛成」の場合には【相手の立場のみに有利な評価づけ】（7回，77.8%），「提案」の場合には【自らの立場のみに有利な評価づけ】（12回，85.7%）がそれぞれ見られやすい。その際，一方の立場について評価づけが行われた後，もう一方の立場について評価づけがなされる傾向がある。具体例を以下に示す。

例（5）【自らの立場のみに有利な評価づけ】➡【相手の立場のみに有利な評価づけ】（学習者の視点）
NS34：いくらぐらい？
NNS2：大体7500円ぐらいで，（中略）ちょっと高くなりそうね。（なるほど）でも，いい宿泊もしてる**から**。（うーん）宇品の近くにドミトリーがあって，（あー）そこに一緒に泊まるプラン。でもね，そういえば，ちょっと確かに，そんなにまだまだわからないから，一緒に泊まるのはさすがにちょっと困りますね。
NS34：うん，それはあるかもしれないけど，まあ，でも，逆に考えたら，それで一気に仲良くなれるかもしれないっていうのも考えられなくはないよね。
NNS2：うん，そうだよね。そうし**よう**，じゃあ，バーベキューっていうプランを一応し**ましょうか**，そのまま。
NS34：うん，バーベキューはありだと思う。
NNS2：あり。
NS34：バーベキューはしよう。で，思ったんだけどさ，釣りとかハイキングとかよりは，（はい）その広島の名所みたいなのを案内したほうが留学生にとってはなんか嬉しいじゃないか，日本に来たって感じがして。
NNS2：あー，*確かにね*，（うん）*しかも*，広島ならではの観光スポットはいっぱいあるから，（そうそう）確かに，市内に行か**なくてはいけない**。

例（5）の前半はNNS2の「一泊二日の旅行」について妥協点を探る場面である。NNS2は「費用の問題」について相手に一旦譲歩しているが，「でも」（斜体）が見られるように，再度，自らの意見の妥当性を主張しようとしている。その後，「泊まりの問題」という新たな問題点に自ら言及している。それに対して，NS34は「一泊二日のほうが仲良くなれる」という相手の提案の妥当性にも言及し，賛成を示している。それを受けて，NNS2は「そうだよね」というあいづち的発話によって相手との一体感を保ちつつ，「よう／ましょう」によって自らの「一泊二日でバーベキュー」というプランの決定を促している。

後半では，NS34の「日帰り旅行」という立場について評価づけが行われている。NS34は「観光名所の案内は留学生にとって嬉しい」という「留学生である相手にも当然認識できるはず」という意見を「じゃないか」によって提示し，自らの提案内容の妥当性を主張している。NNS2の発話の冒頭に見られる「確かにね」や「しかも」（斜体）からわかるように，NNS2も相手の発話に累加する形で賛同し，その妥当性に「なくてはいけない」によって言及している。

このように，日本語学習者は評価のモダリティ形式によって賛成を表明したり，理由節や「よう／ましょう」によって自らの提案の妥当性を主張したりしている。また，日本語母語話者に多く見られる「賛成後，再度の賛成」「賛成後，精緻化要求」というパターンは見られず，「提案―賛成」という一回のやりとりのみで先行文脈を完結しようとする様子が見られた。

5．考察

5.1　日本語母語話者の使用傾向

本稿は，まず日本語母語話者が意見調整の開始部において，「よね」によって提案・意見に言及する際に見られる連鎖の類型と展開パターンについて分析を行った（研究課題①）。その結果，【提案内容に関する

方向づけ】が構築される際に,「問題の総括」が「よね」によって言及され，新たな具体案が導かれるというパターンが展開されやすい。また,【相手の立場のみに有利な評価づけ】において,「よね」によって賛成が行われた後，精緻化要求するパターンも再度の賛成を行うパターンも見られた。さらに,【双方の主張への肯定】が構築される際に,前提をふまえた上で,「よね」によって自らの提案の妥当性が主張されるとともに,相手の提案の妥当性にも言及するパターンが見られた。

このような「よね」の使用傾向は,「相互了解の形成確認」(蓮沼，1995）という固有の用法に関わると考えられる。つまり,「聞き手ばかりでなく，話し手における知識の形成にも関わる」(蓮沼，1995）という意味が「よね」の連鎖構築に反映する形で働いていると言える。また，王・永田（2021）では，日本語母語話者は「当該の内容は相手も共有している・相互に考えるはずだ」と話者が想定していることが「よね」で表されることで，相手に配慮しながら自らの主張を行う傾向があることが指摘されている。このような主張の伝え方は日本語母語話者による意見調整の開始部において多く見られることが分かった。これは意見調整の開始部において課題解決を目指すためには，話し合いの要点を押さえた上で，問題の共有や賛成および双方が賛同できる提案の表明が重要であることと関わると考えられる。

前節で見た例（1）「お金の問題が一番あるよね」の先行文脈に着目すると，留学生の状況と費用設定のギャップについての言及が複数回のやりとりによって行われており,「お金の問題」に関する相互了解が形成されつつあることが窺われる。課題解決のために,これまでの話し合いの要点が指摘されるとともに，その後の議論の根拠が導かれる。「よね」によって共有された後，新たな具体案が提示されているように，ここでの「よね」による「問題の総括」は「提案要求」の発話でもある。このことは,「状況説明や条件・疑問を提示し，他の会話参加者の同意・共感を得て，問題点が会話参加者全員の共通した認識となって，提案の話段に移っていく」(柏崎他，1997）という日本語母語話者の提案の仕方にも通じるものであると言えるであろう。

また，例（2）において,「まったりっていう感じだよね」と「なんっていうのかな」という先行発話に着目すると，ここでも相互了解，つまり聞き手も話し手も認識を形成している途中であることが窺われる。「よね」を用いて賛成意見を述べることで，相手の発話を補完するとともに，自らの認識が妥当かどうかについて確認していると考えられる。このように,「相手が述べていたことを自分なりの言葉でまとめて感想を述べたり，相手が述べようとすることを先取りして述べたりして，相手に共感を要求している」(張，2009）という自然談話に見られる「よね」の機能は，課題解決型談話の意見調整の開始部においても見られることが分かった。ただし，評価づけを深めるために，相手に賛成した後も，提案内容の妥協点に関してさらに精緻化要求を行うという談話展開は日本語母語話者の会話のみに見られた。ここでの「よね」によって言及される賛成意見は相手の精緻化を誘導するためのものでもあり，意見調整のための方略であるとも言えよう。

さらに，例（3）のように,「よね」によって自らの妥当性を主張するとともに，中立的立場で両者の特徴を総合的に比較するというパターンが見られた。それによって両者の提案の特徴がより明確になるとともに，両者ともに納得できるような案につながるという談話展開が実現されている。これは日本語母語話者が相手に配慮を示しながら，両者の共感を保つという合意に向かう調整の仕方にも関わるものである。李・松崎（2009）では，日本語母語話者は双方の立場を取って意見を述べるという「共感型」のスタイルを用いて交渉を進めていく傾向があることが指摘されているが,そのような意見の述べ方は発話レベルのみならず,談話における連鎖レベルでも見られた。

5.2　中国人上級日本語学習者の使用傾向

日本語学習者が意見調整の開始部において「よね」によって構築される連鎖の類型と展開パターン，また母語話者との異同（研究課題②）に関しては,「よね」によって「問題の総括」に言及する場合には【提案内容に関する方向づけ】が見られず,【提案のあり方に関する方向づけ】のみが構築された。また,「よね」によって「賛成」に言及する場合に【相手の立場のみに有利な評価づけ】が構築されやすいことは日本語母語話者と同様である。ただし,展開パターンに関して,日本語学習者には精緻化要求が見られず，再度の賛成のみが見られるという違いがある。さらに,「よね」によって「提案」に言及する場合には，母語話者に多く見られた【双方の主張への肯定】の連鎖構築が日本語学習者には見られなかった。

前節で見た例（5）のように，日本語学習者は「賛成」や「提案」に言及する際に,「よね」をあまり使用せず，評価のモダリティで言い切る表現などを用いる傾向がある。これは中国語母語話者の意見調整のプロセスにも関わると考えられる。郭（2006）では,「日本人は同じ土台に立って，相手の意見を取り入れながら，その上で自分の意見を足していくのに対して，台湾人はその土台が固まっているかどうかを各自で確か

めながら，それでよいだろうと思ったものをみんなで作り上げていく」ことが指摘されている。このような発話は相手との意見交換の機会を減らし，一方的に談話を展開する印象を与える可能性がある。

6．おわりに

本稿では，課題解決型談話の意見調整の開始部における「よね」の連鎖構築について分析を行った。その結果，日本語母語話者と中国人上級日本語学習者のそれぞれに特徴的な連鎖の類型と展開パターンが明らかになった。

今後は，意見調整の主要部において「よね」がどのような類型の連鎖を構築し，どのような展開パターンが見られるかを分析するとともに，意見調整の各局面に「よね」がどのように関わるかを分析することで，意見調整が行われる際の「よね」の機能の全体像が明らかになると思われる。また，本稿では「同等・友人どうし」によるインフォーマルな場面のみを分析資料としたが，フォーマルな場面についても分析することで，本稿の結論がどの程度対人関係によるものであるかを明らかにすることができる。さらに，中国人日本語学習者による「よね」の使用について考えるために，「よね」に対応する中国語の表現の１つとしてあげられる「吧」や，中国語母語場面において課題解決型談話の意見調整がどのように行われるかに関しても考察を深める必要がある。いずれも今後の課題としたい。

【注】

1）開始部や構成要素を認定するにあたって，認定の信頼性を保証するために，日本語母語話者２名がコーディングを行い，一致しない箇所については協議した上で合致させた。

2）本稿で扱う「よね」に関して，上昇下降調と上昇調という二つの音調が観察された。上昇下降調の場合には，聞き手に対して積極的に確認や同意を求め，上昇調の場合には，聞き手の同意が当然得られるという意味になる（市村，2015）と指摘されているため，本稿ではこのような音調の違いにも留意しながら分析を行う。また，「と思うんだよね」のように「のだ」に付加される「よね」に関しては，「確認要求」とは異なる機能を持つ可能性があるため（張，2009），本稿では対象外とする。

3）談話分析では，隣接ペア（Schegloff & Sacks1973）やその拡張である連鎖構築（椙本1998・2000；伊藤2019）に関する研究がなされている。本稿では，椙本（2000）に従い，内容面から連鎖タイプ（本稿の「連鎖の類型」）を検討した。その上で，どのような形によって実現されるかを見るため，展開パターンを隣接ペアという単位で分析した。

4）〈問題の総括―言い換え・繰り返し〉nの「n」は一回以上のやりとりがなされることを表す。

【参考文献】

井上優（2016）「「話し手情報・聞き手情報」と文末形式―日本語と中国語の場合」『日本語／日本語教育研究』7，5-20.

伊藤亜希（2019）「英語を母語とする日本語学習者の合意形成談話の特徴―「提案―応答」の拡張に着目して―」広島大学博士学位論文

市村葉子（2015）「「んだよね」の発話意図を解釈する手がかりとは？―発話意図と音調との対応関係に注目して」『日本語／日本語教育研究』6，149-164.

大浜るい子・程野早由利（2011）「大学生のグループ研究における話し合いの分析」『広島大学日本語教育研究』21，23-30.

王詩凝・永田良太（2021）「課題解決型談話における「よね」と「じゃないか」の使用傾向―日本語母語話者と中国人上級日本語学習者を対象に―」『日中言語対照研究論集』23，28-42.

柏崎雅世・足立さゆり・福岡理恵子（1997）「インフォーマルな「と」相談における提案の分析」『日本語教育』92，60-71.

郭碧蘭（2006）「日台の会話スタイルの比較研究―母語話者のグループ討論を通して―」『明海日本語』10・11，37-49.

椙本総子（1998）「会話者による提案の連鎖の組織化」『日本語・日本文化研究』8，77-88.

椙本総子（2000）「人間関係からみた課題解決の会話の連鎖構造」『世界の日本語教育』10，221-239.

張恵芳（2009）「自然会話における「ヨネ」の意味類型と表現機能」『言語学論叢』28，17-32.

日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法４第８部モダリティ』くろしお出版

蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄（編）『複文の研究（下）』389-419．くろしお出版

水野瑛子・柴田龍希・俵山雄司（2019）「討論の行き詰まりに対する話題展開―日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較―」『日本語・日本文化論集』26，35-55.

大和祐子（2009）「意見の一致を目指す会話における意見交渉の過程―意見が異なる者同士の「歩み寄り」の始まりを中心に―」『言葉と文化』10，59-75.

李霽芳・松崎寛（2009）「交渉場面における日本人と中国人の言語行動―母語場面と接触場面の量的分析を中心に―」『広島大学日本語教育研究』19, 55-62.

Schegloff, E.A. & Sacks, H. (1973) Opening Up Closings. Semiotica, 8(4) : 289-327.